

集まり、バラバラなことを楽しむ

アートの現場から

A C A C 通信

あつという間に小中高の夏休みも終わり、青森公立大学国際芸術センター青森（A C A C）で開催中の景観観察研究会「八甲田大学校」も後半戦に突入していきます（9月25日まで）。完成している作品の展示だけでなく、ギャラリー内での公開制作や参加者を募ってのワークショップ、トークなどのイベントを複合的に組み合わせた本企画。ワークショップで生み出された作品も、ギャラリーA奥の「多目的室」で見ることができます。

8月20日、21日に行われたのは景観研メンバーであり、リトグラフ摺師の板津悟によるワークショップ「八甲田山、積層する地図」。今回の展示では、1953年にリトグラフで刷られた応急修正版の「八甲田山地図」を32分割して拡大プリントし、教育掛図のような形で展示している板津ですが、このワークショップでは展示している地図と同じものの上に、参加者の描いたイメージを重ねて刷りました。

八甲田山の地図の上に描



板津悟ワークショップ1日目終了時の様子

いた絵が載るといふことを念頭に置きながら、参加者が描き出したのは植物や動物、風景、縄文遺跡や青森の思い出など。できあがった作品は画風も画面の使い方もバラバラですが、地図上に集合させてみると不思議とそれぞれが浮かび上がってくるかのようで、描かれたものと地図のスケールの差や、余白からのぞく地図の線の面白さを参加者も楽しんでいたようでした。

景観観察研究会は、4人のアーティスト（板津悟、OJUN、新津保建秀、山本修路と3人の研究者（笹井宏実、伊勢武史、大庭ゆりか）によるコレクティブですが、このワークショップのように普段はバラバラな活動を行っています。今回、まるで一枚の大きな地図のようでもある「八甲田大学校」に集い、個々の専門性から生まれた作品やプロジェクトを展開することで、色々なものが共存する自然世界の複雑さを感じ、一見異なることをしているも考え方や問題意識に

共通点があることなどが浮かび上がってくるかのようでした。それはこの場を体験した方々だけでなく、景観研メンバーにとっても新鮮に感じられたようです。

7人の景観研メンバーと共にイベントなどに参加しているコラポレーターも「八甲田大学校」にとって大きな存在です。9月24日には日本におけるゴリラ研究の第一人者であり、現代社会へも鋭い考察を投げかける山極壽一総合地球環境学研究所所長にお越しいただき、講演と「八甲田大学校」の実践から見えてくることを共に議論する予定です。詳しくは当館ホームページをご覧ください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 慶野結香）